熊西まちづくり協議会（生涯学習部会）主催講座

歴史・楽学講座３　講義録（資料の補足）

文責：中島　浩史

１．講座について

⑴開催日　：2023年6月8日(木)　10：00～12：00

⑵講師：三浦　明彦氏

⑶会場：熊西市民センター　多目的ホール

⑷受講者：25名

２．講義概要

⑴「大島学」

①九州共立大学「山田明研究室」の学生主体で肥前大島の歴史について纏めたもの。

・三浦明彦先生と山田昭教授の指導の下、今秋～来春にも「大島学Ⅱ」を出版予定。

※上記研究室では、「岡垣学」「岡垣学Ⅱ」がある。

⑴筑前大島について

①「大島」は日本各地に複数ある。・・伊豆大島、周防大島(屋代島)　→大きな島に因む

②三つの顔を持つ・・「信仰の島」「国防の島」「流刑の島」

・近年は観光の島として「信仰」イメージが大きい。・・2017年(平成29年)世界文化遺産登録

③信仰の島・・宗像三宮

・沖の島(沖津宮)：長女(田心姫神：たごりひめのかみ)を祀る。

→沖の島は一般の上陸は禁止されており、神職が10日交代でたった一人で奉仕する。

※「女人禁制」・・女性→血(月経)→不浄と捉えられていた ＋ 修行僧の強姦防止

・英彦山、高野山、熊野神社等も女人禁制。⇔　奈良県「室生寺」：女人高野

・大島(中津宮)：次女(湍津姫神：たぎつひめのかみ）が祀られている。

・宗像市田島(辺津宮：ﾍﾂﾉﾐﾔ)：三女(市杵島姫神（いちきしま ひめのかみ）が祀られている)

・秋季大祭(みあれ祭)：毎年10月1日～3日・・平穏、五穀豊穣、海上安全及び大漁を感謝。

→一年に一回、三女神が一同に会すため、田心姫神と湍津姫神を乗せた御座船を大船団でお出迎えするもの。　※神湊(ｺｳﾉﾐﾅﾄ)港から出航する・・「神の湊」の由来

④国防の島

・昭和11年(1936年)、日本陸軍によって砲台が築造された。

→大東亜戦争では、玄界灘を潜航する米軍の潜水艦を攻撃(４門の大砲から8発)→失敗

※海軍から余計なことはするなと厳命

※沖の島にも陸軍が駐屯していた。

孤島だから時化により食糧・物資不足→ミズナギドリ(水薙鳥)を食すことも。

・定番所および遠見番所

→慶長11年(1606年)、海上警備のために定番所(ｼﾞｮｳﾊﾞﾝｼｮ)＋遠見番所を設置。

※定番所は港の際にあり、流人の管理と島の治安を担う・・今でも敷地割の名残りあり

定番所の役人(管理者)は福岡藩士で200石位の知行取りが1名＋2名の足軽
中級武士であっても島の支配者・・島民にとっては「殿」
※遠見番所は丘陵部で、異国船の領海侵入や不審者の海岸上陸の見張りが任務。
足軽2～3名を配置。
寛永20年(1643年)、ポルトガル船(ポルトガル人10名)が漂着。→長崎から送還
延宝5年(1677年)には朝鮮の船、貞享3年(1686年)には清国の船が漂着。
遠見番所の遺構はないが、山口県上関町(萩藩)の遠見番所の遺構が参考になる。

(2)流刑地・筑前大島について・・神様の島に罪人を流すのは意外
①実に３０１年間にわたって「流人の島」・・慶長12年(1607年)～明治41年(1908年)
・外に、能古島、小呂島、玄海島、姫島(玄界灘)
→大島への流刑は主に政治犯や思想問題・・武士、学者、医者、技師(職人)、絵師、商人
※島の人に学問やそろばん(財テク)、技術等を教えていた。・・需要とニーズがマッチ
→取り分け多かった流人は福岡藩士やその他の武士
※幕末は福岡藩内の勤皇派と呼ばれる武士が多かった・・筑前勤皇党(勤王党)の弾圧
・福岡藩主：黒田 長溥(ﾅｶﾞﾋﾛ)・・養子(島津藩の出)：黒田家は直系6代まで
※薩摩藩主：島津斉彬とは2歳年下だが叔父にあたる。
②幕末はどこの藩も「倒幕」「佐幕」と分かれて内部抗争があった。
・江戸時代は約260年間も安泰の時代・・世襲制度：どんなに能力がっても下は下
→下級武士を中心に「世の中を変え、天皇中心の時代に戻す(勤皇思想)」が広まる。
薩摩精忠組、土佐勤王党、長州御楯組
※上級武士は「ことなかれ」主義
③勤皇思想者は倒幕につながる危険思想の持ち主として、君命により処罰された。
・切腹：武士として名誉を保つ、斬首：不名誉
→切腹の作法：懐刀を懐紙で巻き、刃先が5～6分出るようにする。
右から肌脱ぎ左で刀を取り、右手を添えて押し頂き、峰を左に向け直し、右手に
持ち替え、へその上一寸ほどへ左から右へ刀で突き立てる。
腹の切り方は、腹を一文字に切る「一文字腹」、一文字に切ったあとさらに縦に
みぞおちからへその下まで切り下げる「十文字腹」がよいとされた。
→体力的にそこまでは無理なことが多く、喉を突いて絶命へ。
・武市半平太(端山)は十文字腹だった。→時代劇のヒーロー：月形半平太(架空)
・赤穂浪士も全員見事であった。
→内臓が出て、白州を汚さないように深くは切らない。
→江戸時代中期以降の切腹は形式的なものとなり、短刀の代わりに扇子を置き、
腹を切る仕草をした。（扇腹、扇子腹）
→三島由紀夫の切腹：介錯人が一度失敗し「君、落ち着きたまえ」と一喝。
④流人たちが暮らしていた場所：長畑(山奥)、加代(海に面した平地：武士階級)

(3)流人：藤　四郎について
①福岡藩での勤皇志士（筑前勤皇党：50名くらい）
・藤　四郎：二度の島抜け成功

・加藤　司書：上級武士、家老まで出世
　→慶応元(1865)年『乙丑の獄』で福岡市の天福寺で切腹。
・月形　洗蔵：事実上のリーダー
　→薩長同盟の起草文を考案し、早川勇と共に斡旋・・坂本龍馬より先
　→第一次長州征討の際、月形は五卿を説得して長州藩外への移転を実現し、福岡藩の征討中止に貢献。慶応元年（1865年）には三条実美以下五卿が太宰府天満宮の延寿王院(太宰府市)に移る際、これを馬関(山口県下関市)まで迎えに行き案内した。
　しかし幕府が再度の長州征討を決定すると、反対勢力の佐幕派が復権して藩論が一変。洗蔵は斬首される。
・平野　国臣
　→西郷隆盛ら薩摩藩士と親交をもち、討幕論を広めた。文久2年(1862年)島津久光の上洛にあわせて挙兵をはかるが寺田屋事件で失敗し投獄される。
　　※西郷隆盛が入水自殺未遂の際に平野が助け上げた。
　島津久光や大久保利通の反対で退去させられた際に詠んだ歌
　　「わが胸の 燃ゆる思いに くらぶれば 煙はうすし 桜島山」
　但馬国生野で京から落ちた公家「沢宣嘉」を大将として挙兵するが失敗し捕えられ、六角獄舎に預けられていた。　→禁門の変の際に生じた火災を口実に殺害された。
　福岡市中央区の西公園に銅像が、京都市上京区の竹林寺に墓がある。
　鳥飼八幡宮横に平野を祀る「平野神社」がある。
・早川　勇：薩摩・長州藩を連合させた。
　→遠賀郡虫生津村(現遠賀町)の嶺家の三男　→宗像の医者：早川家の入り婿
　→高杉晋作と西郷隆盛を馬関(下関)の春帆楼で秘密会談させることを成功。
　　※春帆楼・・日清講和条約締結の会場・・締結した部屋は現在も移築して保存
　　日本側全権が伊藤博文・陸奥宗光、清国側全権が李鴻章・李経方
　　※湯田温泉・松田家・・長州、薩摩、土佐の勤皇志士が倒幕･皇政復古の密議をした。
　→山口長府の功山寺に都落ちしていた三条實美ら五卿を大宰府に迎えた。
　→慶応元(1865)年『乙丑の獄』で筑前勤皇党の志士は投獄され、月形洗蔵たちは斬首。早川も同年6月に入獄。
　→大政奉還で早川も解放。奈良府権判事を経て、奈良府藩事。その後、福岡に戻る。
・中村　円太：高杉晋作の協力者
　→筑前勤皇党の志士達によって脱獄して長州へと落ちのび、高杉晋作に九州連合を提案。高杉は筑前国福岡に亡命。九州連合の各藩説得を断念して福岡藩へ戻ってきた高杉は野村望東尼の平尾山荘に潜伏。その後、円太らは五卿の太宰府動座に尽力した。
②高杉晋作：奇兵隊など諸隊を創設し、長州藩を倒幕運動に方向付けた。
・第一次長州征伐が迫るなか福岡へ逃れ、平尾山荘に匿われる。
　→高杉が肺結核で亡くなる際に望東尼が立ち会った。
・奇兵隊・・奇想天外、武士階級以外も在籍する奇抜な軍隊　　cf)騎兵隊
　→撰鋒隊・・正式な軍隊（武士のみ）
　→高杉が創設したが、トラブルがあって「隊長」を辞任。以後、「総督」：実質の権力
・五卿の西遷・・尊皇攘夷派の５人の公卿(三条実美ら)都落ちから筑前国太宰府への下向。
　→黒崎に上陸し、木屋瀬→赤間→太宰府

→長州征伐の講和条件として、福岡藩家老の加藤司書や月形洗蔵、早川勇ら、筑前勤皇党や西郷隆盛らの調停・周旋もあり、福岡藩領、太宰府へと移転。

③藤　四郎：二度の島抜け成功

・福岡藩の下士の家に生まれる。勤皇党の一員、平野国臣とは親友。

→一度目は脱藩して薩摩に向かう際に捕縛された。→筑前大島へ流刑。

島抜けした後に長州に亡命、高杉晋作の元に身を寄せた。

その後、平野国臣の但馬国代官所襲撃計画(公家の沢宣嘉を総大将)に参加。

藤四郎は沢を守って長州に逃れた。

→長州に戻った藤四郎は奇兵隊に入隊、五卿移動の護衛へ。

太宰府に到着すると福岡藩の藩吏に捉えられて再び筑前大島へ流刑。

大島の代官や中津宮の宮司とも親交があり、再び、島抜け成功→長州：高杉の元へ。

(4)「望東尼」救出について

・野村望東尼(ﾎﾞｳﾄｳﾆ)：勤皇の母(高杉晋作も母のように慕っていた)

→福岡藩士の未亡人、尼、女流歌人として知られる。

勤皇思想の持ち主で、勤皇派の武士たちを保護していた。

→君命に反したということで筑前姫島へ流罪。

→高杉晋作から望東尼救出を依頼されて他の５人とともに実行。

姫島→大島寄港・・島内の勤皇派の救出(野村助作：望東尼の孫)

助作は既に福岡城下へ移送され救出はできなかったが、複数の同志を救出、下関へ。

→高杉晋作が病に倒れ、下関の林邸の離れで最期を看取った。

※辞世の句「おもしろきこともなき世におもしろく」

→望東尼が下の句を「すみなすものは心なりけり」とつけた。

望東尼の最期は、共に長州領内で暮らしていた藤四郎が看取った。

(5)維新後の藤四郎について

・明治維新により、長州藩主：毛利敬親に招かれ、功労の刀を賜る。

その後、京都の新政府に出仕。

・明治３年に官職を退き福岡へ。福岡藩の官吏。

・明治７年11月3日に亡くなる。享年47歳。

・下関市の奇兵隊墓地に墓がある。

以上